

Title	[グラビア] 琉球から「道の島」へ：宇検村焼内湾を訪ねて
Author(s)	長間, 安彦
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(5)
Issue Date	1993-12-24
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/20369
Rights	浦添市立図書館

琉球から「道の島」へ ― 宇検村焼内湾を訪ねて

奄美には幾度か資料収集で出張しているが、今回(1993年3月)は名瀬市以外に、島の南西側に位置する宇検村を訪ねる機会に恵まれた。村教育委員会主催の「村内文化祭」に展示されたノロ関係資料の閲覧および資料収集を目的にその地を訪問したが、それとは別に、近世期に琉球から薩摩(鹿児島)に向かう琉球船が、航海の途中、大風などで遭難・漂着、または停泊した「道の島」の村・港湾のひとつである「屋鈍村」「佐念湊」「焼内湾」に初めて〈出会える〉ことに期待があった。

写真1は岳の展望台から焼内湾を遠望した風景である。湾内が、近世琉球の時代も日本と琉球間の海上交通の要路として「道の島」域でも重要な寄港、風待ち・避難港であったことは、字湯湾の『白井家文書』の中に「敬白御祈願／湯湾御嶽御寶前／三味一飾／右意趣者去年趣江府公事畢而／今度帰国之處幸至此地願者為／海路安穩延命長久子孫繁昌故也／仍奉祈願成就状如件／文化四年丁卯四月吉日／小禄親方良和／濱元里之子親雲上良典／板良敷里之子親雲上良恩」なる文書からもうかがえ、小禄親方ら謝恩使一行の江戸上りの帰途、焼内湾に入港して湯湾岳に登り「海上安穩」等の祈願を行なっている。また、『琉球藩評定所文書』文書番号1551「従大和下状 咸豊四年」中の174・185の琉球クリ舟(飛舟)の焼内間切屋鈍村漂着、同間切佐念湊への汐掛に関する記事は、いかように奄美島民が琉球人・船舶の漂着・停泊に対して、薩摩(大島代官)の意向があったとはいえ、その処遇の有様や謝恩使の帰国時の寄港および湯湾岳での祈願をみると、薩摩支配を越えて奄美人と琉球人の深い交流の一端を見ることができる。

焼内湾は近代においても、「四面

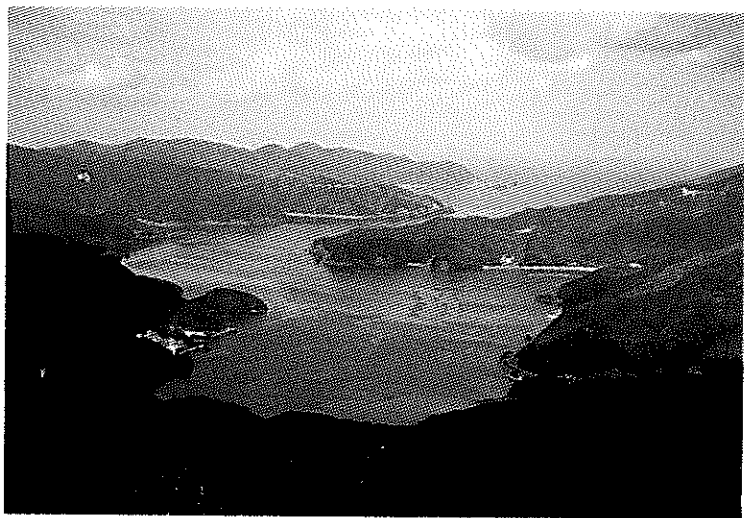


写真1 湯湾岳より焼内湾を望む。佐念湊、屋鈍村は尾根や岬に阻まれて岳の頂上からは観ることはできない。



写真2 字湯湾の港。この港付近にも、かつて「謝恩使」一行が乗船したマールン船が2、3日は停泊したであろう。

丘陵に囲まれ水面鏡の如く些少の波浪だに見ず常に池沼の観あり、一朝暴風に遭はんも至て安全なれば各島及び沖縄台湾通ひの汽船等最良の避難港（湾）」（『焼内村誌』大正5年）であり、宇検村湯湾北東に位置する湯湾岳（海拔約695メートル。奄美大島の最高峰）などの山脈を分水嶺とする川内川の流れが湾内に注いでいる。川内川には、沖縄では見られなくなった「リュウキュウアユ」が今も生息しているといわれる。

奄美諸島は古琉球時代、琉球王国の版図に含まれ、現地のノロや地方役人へ辞令書が発給されていた。奄美で見発見された古琉球辞令書のうち、最も古い年代は嘉靖8（1529）年で「笠利間切の宇宿大屋子職補任」の辞令書である。現在、宇検村で収集されている古琉球辞令書では、嘉靖33（1554）年の「屋喜内間切の名音掟職補任」が古く、間切名「屋けうち」が記されている。余談になるが、沖縄においては嘉靖2（1523）年発給の「渡唐船宝丸の官舎職補任」辞令書がいまのところ、最も古い発給年である。尚真王代の弘治4（1509）年から金銀の簪で身分が分けられたことを考えると、首里王府による辞令書発給はこの年を下らないのではなからうか。進攻を機に薩摩は1610年に奄美へ大島代官を設置、その翌年には大島五島を薩摩直轄とした。勿論、首里王府からノロ・地方役人方へ辞令書発給は行われなくなる。

ところで、奄美大島の琉球帰属については、1266年（英祖王代）・1441年頃（尚忠王代）など諸説があるが、『李朝世祖実録』巻27（1462年）の二月条、琉球漂着（1456年）の朝鮮人梁成らの見聞録に「交戦、國（注、琉球国を指す）東有二島、一曰池蘇、一曰吾時麻、皆不降附、吾時麻則攻討帰順、今已十五餘年、池蘇則毎年致討、猶不服従」とあり、吾時麻（大島）は〈漂着時点から〉15年余前にすでに〈琉球国に〉帰属していたことが記されている。現在、この見聞録に述べられる1441年頃を、『名瀬市誌』（1983年）では〈奄美大島が琉球に帰属した年号〉として扱っている。それ以後、島津の琉球進攻に伴い薩摩藩に直轄される1609年迄は琉球王国の版図に組み込まれ、古琉球辞令書に細見されるように、神女・役人組織も王府機構の枠内にあったのである。徳之島の「ノロの免状及び関係文書」（75丁半・辞令書1葉。先田光演氏よりコピー提供）を読む限りでは、近世奄美は薩摩藩直轄になっても、各村の神事・祭りの中心的役目を担っていたのは、琉球国統治期の神職を継承したと思われる「大阿母」「ノロ」「掟神」と呼ばれる神女たちである。

今回の宇検村文化祭では、「屋けうちまきり」の「屋とんのろ」職を先のノロの姪「かなしもい」に与えた辞令書（万暦22、1594年）が展示されていた。「屋とん」は「屋鈍（村）」のことで、焼内湾口にある1村（字）であるが、写真1では左方の岬裏手に位置し、残念ながら視界に入らない。「佐念湊」もまた、左手尾根に隠れ遠望することはできなかった。

最近、「琉球弧」の枠内で、奄美と沖縄の共生観について語られることが多い。その共生観の根っこにあるものが、先に述べた歴史的、民俗的な結びつきであろうし、風土・習慣・言語などの共通項もある。このことを考えると、古文書などを歴史・民俗資料として扱う者は、それに記される「風景」を踏むことは、史料に描かれる事象解説にも深みが増すのではなからうか。

〈長間安彦〉